直言

石垣島の方々が幸せな生活を送れるように 持続可能な医療・介護サービス提供へ邁進

小規模病院のフットワークの良さ十分に生かす

石垣島徳洲会病院（沖縄県）院長　池村 綾

皆さん、こんにちは。４月１日に当院院長を拝命しました池村綾と申します。私は１９９５年に琉球大学を卒業後、同大学第二外科に入局し外科研修を開始しました。その医局は草場昭教授（故人）が主宰され、大学病院内でも忙しい医局でした。多忙な日々をこなすなか、草場教授から「患者さんと接する際は、自分の親を診るように優しく接しなさい」と教えていただき、現在も強く心がけています。その後、医局人事により99年４月から中部徳洲会病院で外科診療に携わりました。同院には医局の先輩で外科部長の伊波潔先生（現・総長）がおられ、大変熱い指導を受けました。その当時、病院の医師数は三十数人で、研修医枠、スタッフ枠の当直を行いながら、救急外来、内視鏡検査、他科麻酔、緊急手術の対応など猫の手を借りたくなるほど忙しく働きました。医局内の横の連携は大病院と違い大きな壁もなく大変良好で、治療に難渋することがあれば、すぐに相談でき、その日に解決することも多々ありました。また事務職、コメディカルの皆さんにも、すぐに対応していただき、大変働きやすい環境のなかで診療にあたることができました。現在、同院は沖縄本島中部地区の基幹施設となり、職員数も増え、先進医療も十分行える病院に大きく変化しましたが、そうした文化は今も継承されています。

さて、２０２１年秋頃に石垣島に行ってみないかとお話をいただきました。これまで離島医療の応援のため石垣島、宮古島、与論島、沖永良部島、屋久島などに出向きましたが、人的、物的資源が限られている離島で私に何ができるかを考え抜いていた時、家族に相談すると、「いつでも応援しているよ」と、快く送り出してくれました。

訪問診療時に「ありがとう」患者さんの言葉が明日への糧

赴任して約１カ月半が経ち、島独特の医療環境、生活環境を知ることができました。訪問診療では高齢の独居で生活もままならず、住環境の悪さに驚かされたり、元気な１００歳のおばあちゃんの素敵な笑顔に癒やされたり――考えさせられることが数多くありますが、帰り際に「いつもありがとうね」と感謝の言葉をいただき、明日への糧としています。つい先日、超高齢の方が最期を迎えるにあたり、ご家族が自宅での看取りを希望されました。急いで訪問看護師、ご家族と面談し、その日に患者さんは自宅へ戻られました。戻られ、すぐに天寿を全うされましたが、その際、自宅には数多くのご家族・親族が集まっておられました。皆さん、温かい気持ちで大変満足しておられました。これが「島ならではの医療の完結だなぁ」とあらためて思いました。人生１００年！島の方々が今後、より良い生活環境、医療環境のなかで過ごせるように、当院のみでなく、島の他の医療施設とも十分に連携を取りながら、お手伝いできればと思っています。

当院は職員数約１００人、許可病床は急性期病床53床、地域包括ケア病床９床と小規模な病院です。私を含め常勤医２人、徳洲会グループの初期研修医、専攻医と合わせて４人で、依然として猛威を振るう新型コロナ感染症の診療、日々の診療、訪問診療などを行っています。スタッフの数やスキルも限られるため、グループ内外の大病院からほぼ毎日、温かい応援をいただいております。上部下部内視鏡、気管支鏡などの検査、循環器科、泌尿器科、整形外科、皮膚科、乳腺外来、麻酔科などの特別診療や手術など、本当に感謝しています。徳洲会の理念〝生命だけは平等だ〟、「生命を安心して預けられる病院」、「健康と生活を守る病院」を実践するため、朝礼で理念の唱和を継続し、職員全員の方向性を一致させ、島の方々のために微力ながら貢献できればと思います。

病院機能評価の取得へ 準備委員会を立ち上げ

今後の目標としては、〝訪問介護看護ステーション〟やグループホーム、介護施設など、シームレスな医療・介護施設として充実を図るとともに、日本医療機能評価機構の病院機能評価取得へ向け準備委員会を立ち上げ、鋭意準備中です。各部署からの意見をいただきながら小規模病院ならではのフットワークの良さを十分に生かし、島の方々が幸せな生活を送れるよう、持続可能な医療・介護サービスの提供に職員一丸となって邁進（まいしん）したいと思います。今後とも応援をよろしくお願いいたします。

皆で頑張りましょう。

神戸病院

医療療養病棟を開設

多職種連携でサポート

神戸徳洲会病院は５月に医療療養病棟（39床）を開設、４月に入職した小川信行・総合内科医師が同病棟の専従となった。同院が立地する垂水区は65歳以上の高齢者が県内でも多い地域であり、同病棟は地域からのニーズも高い。

小川医師（右）や新矢副主任（その左）ら多職種でカンファを行い情報共有

RSTに特定看護師

医療療養病棟は急性期医療を終え病状が安定したものの、継続的な医療的介入を必要とする慢性疾患の患者さんが入院する。開設の１カ月以上前から、配属する看護師を対象に勉強会を精力的に行い、準備を進めてきた。中村美津・看護部長は「療養病棟は急性期と在宅の中間的な役割を担い、家族看護の必要性も高いので、看護師として学ぶべきことも多いと思います」と強調する。

同病棟では多職種連携が活発だ。週１回、医師や看護師、ＭＳＷ（医療相談員）などがカンファレンス（症例検討会）を開き、患者さんの治療方針や退院に向けた課題などを検討。また、呼吸サポートチーム（ＲＳＴ）や摂食嚥下（えんげ）チーム（ＳＳＴ）が定期的にラウンドし、サポートする。ＲＳＴには呼吸器関連区分の特定行為研修を修了した特定看護師が所属、ＳＳＴは４月に摂食・嚥下障害看護認定看護師が誕生し、新たに立ち上がった。

緩和ケアも実施しており、近く緩和ケアチームを立ち上げる計画。新矢渚・看護副主任は「患者さんやご家族と目標を共有し、対等なパートナーとして力を合わせていくＳＤＭ（協働意思決定）を実践しています。一人ひとりの人生の道のりのなかに、医療者がどのように携わっていくのか、一緒に考えていくことが課題です」と示す。

同院のキャッチコピーは「赤ちゃんからお年寄りまで、やすらぎと希望を与える病院」。同病棟の開設により、ケアミックス病院として地域での役割も明確になった。新矢副主任は「世代を超えて愛される病院、在宅や施設へと途切れない医療ができる病院として、当病棟の役割は大きいと思います」と意気込みを見せている。

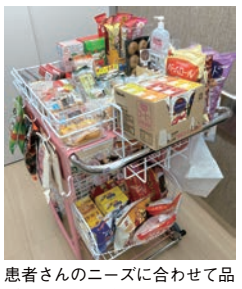
病棟へワゴン販売開始

――札幌南病院

札幌南徳洲会病院は週１回、病棟でのワゴン販売を開始した。自分では買い物に行けない入院患者さんが、買い物の楽しみを味わいリフレッシュするのが目的。これまで動けない患者さんの代わりに看護師が売店に行くことがあったが、その負担軽減にもつながる。

３つの病棟を週に１日ずつ回り、時間になると看護師に付き添われ患者さんが集まってくる。よく手に取られるのはパンやお煎餅、クッキーなどの食品、ティッシュペーパーや歯ブラシなどの日用品。看護師をとおして前もって患者さんから売店にリクエストが来ることもあり、ペットボトルのお茶は銘柄を指定されることもある。

売店事業部の杉浦智春パート職員は「ワゴンのまわりに何人か集まった時は、人の買ったものを見て、『私も欲しい』と、楽しんでいる様子がうかがえます」と目を細めていた。



患者さんのニーズに合わせて品ぞろえしたワゴン

臨床意思決定支援システム

アイデア募集中!!

全職員対象に相談ベースでも可

徳洲会グループ内に発足した「臨床意思決定支援システム委員会」（CDSS委員会）は、全職員を対象にCDSSに関するアイデアを募集している。CDSSは主に臨床ビッグデータやAI（人工知能）などを活用し、医療者に必要な時に最新の科学的根拠と知見に基づく情報を提供し、臨床での意思決定を支援するシステム。徳洲会グループが保有する膨大な医療情報を用い、すでにCDSSの研究を一部行っている（下記参照）。

- 機械学習を用いた予期せぬ患者急変早期警告システムの研究開発（入院患者さんのバイタルサイン情報をベースに）
- 新型コロナウイルス陽性者の重症化を予測する早期警告システムの開発

同委員会は「職種は問わず、相談ベースでも構いませんので応募を」と呼びかけている。同委員会への相談はQRコードもしくはe-mail（cdss@tokushukai.jp）から。